

潮流



今年4月のメキシコの流行から始まった豚由来の新型インフルエンザは、7月24日の時点で国内感染者が5千人を突破し、鳥取県内でも広まってきています。季節性インフルエンザと同様に感染力は強いようですが、感染者の多くは軽症で回復し、原則として自宅療養するように、状況に

鳥取県中部医師会副会長
NPO法人未来副理事長

松田 隆

じて国の対策も変更されてきています。

昔は、家族も多く、病は家庭で看ることが当たり前で、氷嚢や手ぬぐいで頭を冷やして傍らに寄り添って、一晩中寝ずの看病をしたり、死も自宅で看取っていました。

核家族化が進み、経験不足の中で、家族の年長者や経験者からのアドバースが受けられず、忙しい父親にも聞いてもらえず、孤立化し不安に駆られ、休日や夜間に緊急性の少

で、患者さん自身が考えを判断することではなく、なったのではないかと思

います。核家族化が進み、経験不足の中で、家族の年長者や経験者からのアドバースが受けられず、忙しい父親にも聞いてもらえず、孤立化し不安に駆られ、休日や夜間に緊急性の少

り、小児救急医療電話相談も行われるようになります。

を受け取る者にとっては大切な要素です。しかし、医師のマンパワーが限られ、特に、夜間救急の多

くを占める小児救急を担う小児科医不足の現状で

一方、自分の都合で、休日や夜間に緊急性の少

し、コンビニ受診を控え、かかりつけ医をもつこと

をスローガンに2007年「県立柏原病院の小児科を守る会」(兵庫県)

こり、小児救急医療電話相談も行われるようになります。

ます。今年度から、鳥取県小児科医会の協力のもとに、0〜6歳くらいの子どもを持つ保護者等に

対し、子どもの病気などの際の救急受診も含めた対応方法、医療の現状などについて小児科医が直接話を「医師による小児救急対応の出前講座」を行っています。

保護者の安心感を確保するとともに、地域医療の現状を理解し、限られた医療資源を上手に利用していただくように、医師だけではなく患者さんや住民の方との協働で、地域医療を守っていくことが大切です。

新型インフルエンザとコンビニ救急

医療が進歩し、病気を治すことの効率化が図られ、集約化されると、病気の(病人)を診るよ

りも、疾患としての病気を治すことに目が向けられ、病院志向が強くなり、

専門家である医師にすべてを任せ、何でもしてあげる医師が増えること

れたお母さん方が、医師の「大丈夫ですよ」という言葉を聞くために、夜間の救急外来を訪れることとは、致し方ないことかもしれません。

気軽に、いつでも、どこでも、安心が得られる「医療のコンビニ化」は、

救急医療に限らず、医療

重症患者や入院患者の急変の対応に影響を及ぼし、医師の疲労困憊を招き、医療崩壊の原因にも

なり。このような小児医療の危機の中で、親自身が救

急受診のかかり方を勉強

新型インフルエンザの感染症対策や救急医療の問題はひとりひとりの問題です。自分の健康は自分で守り、子どもの健康は親が守ることの中で、

優先順位を決める自己トリアージができるようになることが必要だと思

い

(倉吉市)